

インド芸能をめぐるコミュニケーションの変容

コロナ状況下のシンガポールを事例に

竹村嘉晃 たけむら よしあき

人間文化研究機構人間文化創発センター研究員、国立民族学博物館グローバル地域研究プログラム総括班事務局特任助教、AA研共同研究員

多民族国家のシンガポールでは、人口の1割を構成するインド系の人々の芸能が「ナショナル」な文化として位置づけられている。

コロナ状況下のシンガポールにおけるインド芸能の諸相について考えてみたい。

フィールドで直面した COVID-19パンデミック

世界規模での感染が深刻化したCOVID-19による影響は、人と人とのかわりあいだけでなく、音楽・芸能の上演やそれらをめぐるコミュニケーションにも様々な形で及んでいる。

年間1,850万人(2018年統計)以上の観光客が訪れる東南アジアの小さな都市国家のシンガポールでは、2020年1月23日に中国・武漢市からの旅行者が新型コロナウイルスに感染していたことが報道された。翌日、旧正月を祝う演説のなかでリー・シェンロン首相は、新型コロナウイルスの感染状況は重症急性呼吸器症候群(SARS)の時と比べてまだ深刻ではないという見解を示し、「われわれは準備が整っている。なぜならSARSを経験して以来、こうした事態に備えてきたからだ」と自信を見せた。首相の演説後、公共機関の出入り口ではサーモグラフィや検温器によるチェック、IDの確認などが行われるようになり、感染拡大を警戒する態勢が徐々にとられていった。当時の私は、多民族国家のシンガポールで「ナショナル」な文化として位置づけられているインド芸能の受容動向に関するフィールドワー

クを行っていたが、「未知の感染症」に対する国民の不安とその影響を目のあたりにしていた。それまでに確定していた実演家へのインタビューの予約が突如キャンセルされたり、インド舞踊教室の教師や生徒の親からはインタビューをオンラインや電話で済ませたいという返答を受けたり、対面での聞き取りという手段が明確に避けられていった。政府が3月下旬にロックダウンを実施する前日、従来のフィールドワークが困難であると判断した私は、旅行者の姿が消えたチャンギ空港から日本への帰国の途につくことになった。

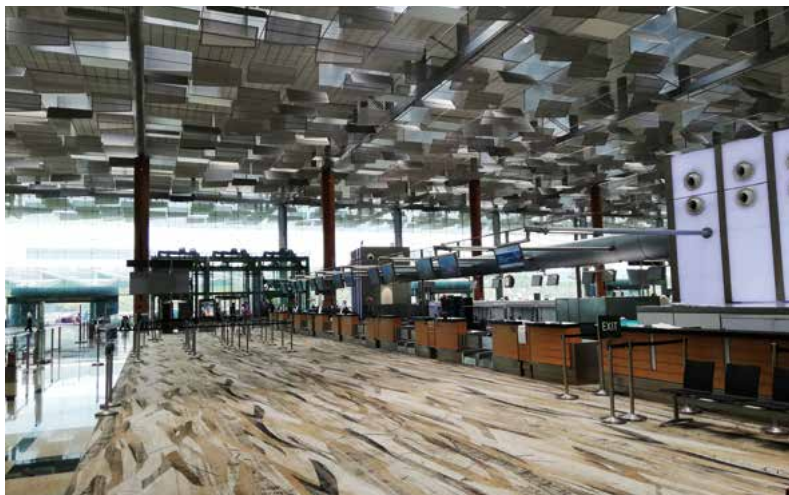
芸術文化への支援と オンラインによる芸能公演の推進

芸術文化政策を推進するシンガポール政府は、2012年に発表した「芸術文化戦略レビュー・レポート(The Report of the Arts and Culture Strategic Review)」のなかで、市民と社会のための文化政策を行っていくことを宣言し、国家アイデンティティを再構築する重要なものとして芸術文化を位置づけている。COVID-19の感染拡大による影響から各種イベントが中止を余儀なくされるなかで、政府は2020年



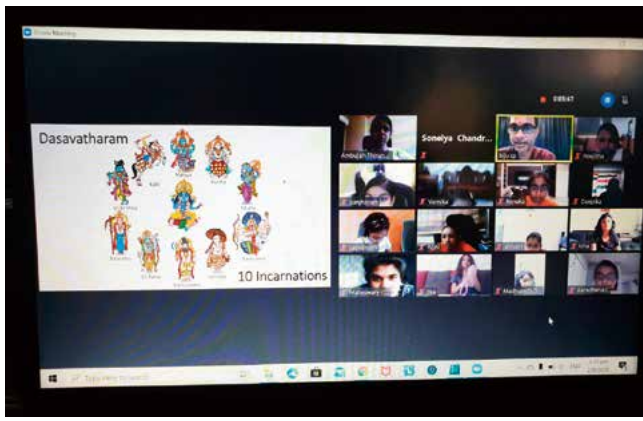
3月に文化芸術分野への支援金として160万シンガポールドル(約1.2億円)の支給を発表し、その後も芸術文化復興支援パッケージとして総額5,500万シンガポールドル(約41.5億円)の支援を発表、さらに5月には文化芸術関係者の生活を保護するための様々な施策を明らかにし、芸術文化およびそれらを担う人々に対する国の支援方針を明確に示した。

こうした政府による支援のもと、コロナ状況下で対面レッスンや公演を実施できない各芸術団体は作品のデジタル化をすすめ、オンラインやオンデマンドによる舞台芸術公演を実現していった。たとえば、政府の外郭機関の一つであるインド文化遺産センターが2020年9月に開催した文化イベントCulturaFest 2000では、対面による舞台イベントに加えてデジタル・プラットフォームを用いた作品がYouTubeやFacebook上でライブ/オンデマンド配信された。多くの公演は無料で視聴ができ、国内外から多数のアクセスがあった。同センターの公式発表では、シンガポールを中心にインド、マレーシア、オーストラリアなどからのべ140万人以上の人々が作品の動画を視聴しており、インドや他国で暮らすインド系出演者の親族からは「遠



ロックダウン前日のチャンギ空港(2020年3月)。

*写真はすべて筆者撮影。



オンライン・レッスンの様子
(2020年8月@Bhaskars Arts Academy)。



エスプラネード
劇場で開催され
たインド芸術祭
(2022年11月)。



インド芸術祭
での無料コン
サートの様子
(2022年11月)。

く離れて暮らす姪や孫娘の活躍を目にすることができた」と感謝の声が寄せられた。またこうしたデジタル化の余波は、欧米諸国で開催されたインド芸術フェスティバルに映像作品が上映されるなど、シンガポールのインド系舞踊団がグローバル・インドの世界と接する絶好の機会をもたらした。

オンライン・レッスンがもたらしたもの

ブロードバンドが世界的に拡充した2000年代以降、欧米諸国のインド系ディアスポラたちの間では、インドのグル(指導者)からオンラインで古典音楽や古典舞踊を学ぶレッスンが広く浸透している。シンガポールではインド系芸術団体の活発な教室運営によってオンライン・レッスンはこれまで普及してこなかったが、ロックダウン後の2020年4月から対面レッスンが中止されると、各教室のレッスンはオンラインに切り替えられた。

オンライン・レッスンに対する生徒たちの反応は、個別レッスンとグループ・レッスンで明らかに異なったようである。個別レッスンはもともと公演を間近に控えている技術的に高いレベルの生徒が集中的に受けるものであり、モチベーションが維持されやすかった。一方、グループ・レッスンの生徒たちは小中学生が中心で動機も様々であり、親の言いつけによる習い事の

一つとして通っている者も少なくない。自宅で受けるオンラインのグループ・レッスンは教室に漂うような緊張感が希薄で、モチベーションの維持が難しく練習不足が深刻化していった。また住宅事情が厳しいシンガポールでは自宅で練習スペースを確保することが困難であり、騒音に対する近隣住民の苦情も懸念された。さらに自ら画面上の操作をしなければならない生徒たちは身体全体を投影することに困惑し、教師側も全ての生徒の様子を画面上で確認することに苦労していた。

こうした諸事情から、通常のレッスン内容を維持することが難しいと感じた教師たちのなかには、普段のレッスンでは行わない座学を取り入れ、インドで著名なコミック・シリーズの〈アマル・チトラ・カタ〉を用いるなどしてヒンドゥー神の神話やラーマーヤナ物語を解説し、生徒たちの関心を引こうと努めていた。

一方、オンライン・レッスンには、コロナ状況下で自宅にいる機会が多くなった仕事をもつ成人女性たち(多くはかつての生徒)が気分転換や運動を兼ねて参加するようになった。「体型もかわり今更教室に通うのは恥ずかしい」と感じていた彼女たちにとって、気軽に参加でき利便性が高いオンライン・レッスンは、教室とのつながりの再編やインド文化への再評価をもたらす機会を提供したといえるだろう。

コロナ状況下における芸能をめぐるコミュニケーション

2022年初頭、コロナ状況下の生活が当たり前と感じられるなか、シンガポールでは各種芸術イベントやフェスティバル、教室での対面レッスンなどが本格的に再開された。公演時の座席数やマスクの着用、対面レッスン時の人数や生徒の入れ替え時間の確保といった規制はあるものの、パンデミック以前の光景が戻りはじめた。

芸能と人とのかわりあいには、作品の上演や鑑賞はもとより創作過程や教授の場におけるコミュニケーションも含まれる。ポストコロナの状況のなかで、舞台公演や教室でのレッスンが再開された直後、実演家や教師たちからは作品づくりの過程やクラスの雰囲気における違和感を訴える声が聞かれた。COVID-19の感染状況に鑑み、現場にはできるかぎりコミュニケーションを控えるような気配が漂い、クラス前後の教師と生徒との交流や親たちとのコミュニケーションも控えられ、どこか殺伐とした雰囲気が感じられるという。

触れあうことがはばかれたコロナ状況下において、生の身体を基盤とした芸能に対する人びとの認識や価値づけは従来のものと変わらないのであろうか。コロナ状況下で人と人とのかわりあいが大きく変化したなかで、作品の創作過程や技芸の教授だけでなく、芸能をめぐる様々なコミュニケーションにいかなる影響が及んでいるのだろうか。この冬、2年8ヶ月ぶりにフィールドへ戻ることができた私は、社会における芸能の存在と芸能をめぐるコミュニケーションについて改めて考えさせられている。

FP